

「看護研究・実践報告」の発展に向けて

奈良県立医科大学附属病院

副院長・看護部長 大名 美記子

看護部における「葦」第44号が発刊されることを大変喜ばしく思います。医療を取り巻く環境は少子、高齢社会の進展、医療技術の進歩、及び医療提供の場の多様化等により大きく変わってきており、その中で、国民の医療に対する意識は、安全・安心の重視とともに、量から質の向上をより重視するといった方向へ大きく転換してきています。附属病院においてはこれらの変化、さまざまな課題に対する取り組みとして、今年度は病院長発案で「7つの診療プロジェクト」を立ち上げ、それぞれが定期的に協議を積み重ね、「医療の質向上」「患者サービス」「病院経営」など、全ての看護単位や組織活動に変化をもたらしています。

看護実践現場における看護研究・実践報告は、その現場で看護を実践している看護職者が、自施設あるいは自部署の実践上の課題を明確にして、その課題を解決するための方策を考案し、方策に取組み、その成果を明確にするものであります。そして、それらの成果は看護業務の改革や看護サービスの質向上を図ることになります。

看護各部署においては成果を公表する場、年1回開催される看護研究・看護実践報告会や学会など院外発表を目標に日々、多忙な看護活動の狭間で研究活動に取り組んでいます。しかし、このことは時にはやらされ感や個々の負担感となってしまう「研究のための研究で終わってしまわないか」危惧されることもしばしばです。これまでの「葦」巻頭言で、先人達が論文は「目的と結論」によってその論文の意義がわかるとして示唆を与え、論文への期待が多く述べられています。看護学部・看護学科は他の学問と比べ体系化が遅れていると言われ、それゆえ看護実践の場で現象を理論化すると共に、理論を検証する努力も続けられなければなりません。

これからの「看護研究・実践報告」の発展においては、臨床と看護学科とのコラボレーションを積極的に推進していくことが必要と考えます。

さまざまな場で働く看護職者と看護学科教員が共同研究を推進することにより、臨床の場に存在する問題点の掘り起こしを図り、その解決法に向けた科学研究を推進し、そこで得られた成果を臨床の場にフィードバックする。このことはよりよい医療、看護の提供をめざすことになります。